明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

あんげろす

愛と正義の口づけ

加山久夫

「慈しみとまことは出会い　正義と平和は口づけし
まことは地から萌えいで　正義は天から注がれます。」
（詩編８５編 11，12 節）この詩人の思想は、古代イスラエル預言者の思想にも見られるものであり、預言者かつ詩人であるイエスにも引き継がれている。神への愛・隣人への愛（ルカによる福音書１０章２７節）を何にもまして重要な神のいましめとしたイエスは、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」（マタイによる福音書６章３３節）と語る。イエスにおいて愛と正義は口づけする。愛のない正義は危険であり、正義のない愛は中空構造になる。

思えば、戦後７３年目を迎えたいま、中空構造化が進んできているわが国精神文化を辛うじて下支えしてきた日本国憲法も空洞化されようとしている。何とかしてこれを押し戻したい。

第 75 号
2018 年 3 月

秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書（モーセ五書）』（講談社学術文庫）の刊行を祝して

久山道彦

秦剛平氏は，イエスのほぼ同時代人フラヴィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』と『ユダヤ戦記』（ちくま学芸文庫）の翻訳者として，また古代キリスト教を語る上で不可欠なエウセビオスの『教会史』（講談社学術文庫）の翻訳者として知られている。それだけでも，日本におけるキリスト教の研究にとり，驚嘆すべき貢献である。翻訳だけではなく，日米同時出版された『エウセビオス研究』全3巻（リトン）の編者としても名高い。ちなみにこの共同編者は，2002年11月に本学でも講演して下さったHarold W. Attridge教授である。（この学術講演会については2003年の『あんげ.ろす』に報告がある）さらに，『乗っ取られた聖書』（京都大学学術出版会）で新しい聖書理解の重要性を示唆し，『旧約聖書を美術で読む』のシリーズ（青土社）や，『美術で読み解く旧約聖書の真実』のシリーズ（ちくま学芸文庫）でも，キリスト教美術からのアプローチにより，多くの読者を魅了している。これまで『七十人訳聖書』（以下，LXXと略記する）のモーセ五書の各巻は河出書房新社から出版されていたが，今回，それらがまとめられ，コンパクトな一冊の講談社学術文庫になった。この画期的出版について，筆者の学生時代の拙い初学びの思い出を辿り，その意義を述べてみたい。

今からもう35年以上も前のことである。大学の3回生になり，古代キリスト教思想家オリゲネスの『ヨハネ福音書講解』を演習で読むことになった。ギリシア語で書かれたこの書物には，多くの聖書の引用があるのだが，困ったのは旧約聖書の引用が，当時一般的に使われていた『口語訳聖書』とかなり異なっていたからである。それもそのはず，ヘブライ語原典（これについては後述）からの引用というよりも，『七十人訳聖書』からの引用が多かったからである。

そこで，A. Rahlfs編の『Septuaginta』を購入し，手探りでオリゲネスの引用を確認し始めた。しかし，オリゲネスの旧約聖書の引用は，必ずしもLXX通りと言う訳でもなく，他のギリシア語訳からのものもあることに気づいた。文献学者でもあったオリゲネスは，『Hexapla（六部共観）』を編纂して，当時使用されていたヘブライ語原典と他の複数のギリシア語訳（Aquila, Symmachus, Theodotion）とを並べて比較するという作業を行ったからである。という訳で，図書館からF. Fieldによる『Hexapla』全2巻を借り出してみたものの，全く歯が立たなかった。そもそもギリシア語だけでなく，学び始めたばかりの私のヘブライ語の読解力がかなり怪しかったからである。

しかし，LXXからの引用箇所は何とか正確に読みたいと，図書館からゲッチンゲン版『七十人訳』（秦訳『七十人訳聖書』の底本である）の主要な巻を借り出し，押し入れに並べては，必要に応じて繙いてみた。というのもLXXこそが初代キリスト教徒にとっての「聖書」だったからであり，その理解によって，黎明期のキリスト教は，イエスの言動に対する理解を深め，信仰共同体の在るべき姿を模索したからだった。現在各国語訳の底本とされるヘブライ語原典『Biblia Hebraica Stuttgartensia』（BHSは主として11世紀の写本による）を底本とする日本語訳を読んでいるだけでは，最初期のキリスト教は，そして古代キリスト教思想も理解できないのではないか？そう思えたのは，初学徒として幸いであった。

だが，いったい誰が（それも一人ではなかろう），どのような「原文」から（それもわからない），BHSから極めて離れている「訳」を作成した（その意図は？）のであろうか？LXXの由来を語る「アリステアスの書簡」についても諸説あり，真相の解明にはなっていない。宗教改革者ルターがユダヤ人と対論する上で，ヒエロニムスによるラテン語訳に由来する

『Vulgata』ではなく，ユダヤ人が使用しているヘブライ語本文からドイツ語訳を作ったとしても，そもそも，その「ヘブライ語本文」とやらが問題で，マソラ本文をどこまで信用すれば良いのかを考えなくてはならない。預言者（譬えばホセア書）の原文をBHSで読めば，テクストの様々な「乱れ」・「崩れ」があり，いくら正確な日本語訳であると言い張るとしても，テクスト本文だけでは到底意味が通らない所が多々あるからである。

そんなこんなで，オリゲネスの『ヨハネ福音書講解』を読み，彼の聖書解釈を学ぶつもりが，彼の聖書の引用文の問題から聖書テクスト本文の問題に振り回されることになってしまった。だが，そのことから非常に重要な着眼点を与えられたのかもしれない。

本当にキリスト教を理解することは難しい。上述したように，キリスト教の経典である聖書についても，わからないことだらけである。「聖書にそう書いてあります」などと簡単に言うが，本当にそう書いてあるのか？その翻訳は正しいのか？その翻訳のもとになるテクストは正しいのか？そもそもテクストの「正しさ」とは何なのか？ここで頭を抱え込む。また，テクストに基づいて開陳される多くの聖書解釈は学問的に正しいのか？その時々の読み手の勝手な思い込み，恣意的な解釈に過ぎないのではないか？それは教義の問題に至る射程をもつ。「聖書の理解が学問的である必要はない」などと暴言を吐く人々もいるが，いったい誰がこれまで聖書を写し，伝えてきたのか？様々な写本のどれが一番古く（ただ古ければ良いとは限らない！），また「原文」に近いのか？その判断基準は？近代的な史的批判的本文研究といえども，決して万全ではないのである。むしろ壮大な仮説の蓄積と言って良い。聖書の学問的研究を放棄することは，聖書を曲解することによって生じた悲劇の歴史（アパルトヘイト！）に目をつぶり，過ちを繰り返すことに他ならない。それで良いのか？だが，果たして聖書全体にわたり，矛盾しない一貫した聖書解釈などというものはあるのか？そもそも聖書解釈に基本的原理は存在するのか？これまた頭を抱え込んでしまう。聖書そのものについて，どのような立場をとるかで，聖書の理解に，そしてキリスト教の理解に，根本的な相違が生じてしまうからである。

さて，私が学生時代に，この秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書』を持っていたら，なんと心強かったことであろうか。「ギリシア語テクストの記述がヘブライ語テクストのそれと異なる場合，その箇所は太文字の明朝体で示し，またギリシア語テクストにあるがヘブライ語テクストには欠落している語句は，ゴチック体で示した。」と凡例にある。そのようなヘブライ語テクストとの相違の数は，訳者が言うように，半端ではないのだが，それら全てが活字を変えて示されているのである。何という優れた工夫であろうか。これはありがたい。地名や人名などの固有名詞は，『新共同訳聖書』に準じているので，非常に読みやすい。しかも，巻末には丁寧な註が付いている。本書の３分の１が註であると言って良いだろう。これは助かる。これを読まずにおられようか？なぜなら，これこそ初代キリスト教徒たちが，パウロたちが読んでいた「聖書」なのだから。

秦氏は既にLXXのイザヤ書・エレミア書・エゼキエル書の三大預言者と十二小預言者も訳し終えておられる（青土社）。それらが遠からず，学術文庫のようなポケット版で手にできることを熱望する。さらには歴史書や詩書も！ルターによる「ヘブライ語原典から」という原典主義も悪いとは言わない。しかし，それは原始キリスト教を理解する上で，本質的に有効な手段であるかは問われなくてはならない。今回の秦剛平訳『七十人訳ギリシア語聖書（モーセ五書）』（講談社学術文庫）の刊行を，心から祝す所以である。

くやま・みちひこ（所員）

聖書の舞台を旅するということ

高井啓介

私は、2002年から2010年にかけて、毎年一回ずつ八度にわたってパウロの伝道旅行の跡をたどり、トルコ、ギリシャ、キプロス、シリアなどの国々を旅したことがある。その旅は、新約学者の佐藤研氏（立教大学名誉教授）に運転手として同行したものであり、私にとって自分の中に深く刻まれることになる体験であった。今も忘れ難いその旅の記録は、佐藤氏の著書『旅のパウロ　その経験と運命』岩波書店、2012年のなかに詳しく書かれている。

使徒パウロについては、その書簡から読み取れる思想がキリスト教信仰にとって極めて重要なものとされ、伝統的にその神学が研究の対象となることが多い。しかしパウロの書簡とそこに現れる神学は、佐藤氏も述べるように（2頁）、特定の場所に居を定めて書かれたものではなく、伝道の旅をしながらその旅の途中で紡ぎだされた、いわば旅の副産物でもある。佐藤氏は次のようにも書いている。「つまり、彼の本領はその旅の行動性の方にあり、手紙は言うなれば二次的所産なのである。」（同頁）。この理解こそが、佐藤氏をパウロの行動の跡を辿る旅へと駆り立てたものである。パウロの旅を辿った佐藤氏によるパウロの思想と神学の理解に関してはご紹介した本を読んでいただきたい。一方で同行した私自身の関心は、その旅を辿ることで、書簡においてパウロが語る内容、そして使徒言行録においてパウロについて語られる事柄について何か発見があるのではないかと考えていた。

たとえば、アンティオキアを出発した第一回伝道旅行（使13-14）のパウロは、同行するバルナバの故郷のキプロス島を経て、現在のトルコ南部のペルゲという町に上陸した（使13:13）。ペルゲは通過点に過ぎずそこからパウロは北上している。ペルゲがある沿岸部から北上すると、20ｋｍほどの距離を進みながら、実に1100mの高低差を登りアナトリア高原に達するのである。二人はそこからピシディアのアンティオキアまで歩く。アンティオキアの遺跡は現在ヤルバチュという町の郊外にある。ローマ風の建築物の遺構も散見され、この町が重要な植民都市であったことがうかがえた。数多くの同調者もいたが迫害にもあって二人はセバスティア街道に沿って南東にあるイコニオンの町まで歩いた。この町は現代のコンヤという大きな宗教都市であり発掘はほとんど行われていない。イコニオンのシナゴーグでも多くの人々が信仰に入るが、パウロとバルナバに悪意を抱くものもあって両者の間で分裂が起こった。危害を加えられる可能性を察知した二人は、東へと旅を進め、リストラとデルベに逃れたとある。両方の町とも発掘がなされていない。彼らはデルベから今度は全く逆のルートをたどりペルゲまで戻り、そこから港町のアタリアを経てシリアのアンティオキアへと船出するのである。これが第一次伝道旅行といわれる行程である。

ところで、この行程を記録する使徒言行録の記者はパウロの滞在と活動に関しては多くを記すが、その移動に関してはほとんど関心を持っておらず、それゆえに読者はその移動が容易になされたと感じてしまう。しかし、実際に二人が旅したルートを辿ってみると、ペルゲからアンティオキアまでは200km、そこからイコニオンまでは140km、リストラまではそこから35kmもの距離にあり、都市間の移動そのものが大きな事業であったことがわかる。現代の車を使っての移動ですら非常に長い移動距離に疲労困憊になる。ましてやパウロは徒歩である。アナトリア高原に登る高低差も山道を前に尻込みするほどであり、高原では地平線がはるかに見えるほどの平坦でどこまでも続く道のゆえにその距離が途方もないものと感じたであろう。それも往復の旅である。旅するパウロの意志の強靭さと情熱の激しさを思い知るのである。そしてパウロの肉体に与えられていたという棘（一コリ12:7）すなわち弱さが彼の脚に関連するものでないことだけは確かであるとも思った。

ところで、パウロの旅の延長として、私は佐藤氏とともにヨハネ黙示録の七つの教会（1:9～3:22）の跡も訪れている。そのときも、現地を旅したことで、聖書の記述が腑に落ちたということがいくつかあった。そのうちのひとつを

最後にご紹介したい。ラオディキアにある教会については黙示録の著者は次のように言う。「わたしはあなたの行いを知っている。あなたは、冷たくも熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。」(3:15-16) この表現は、教会の人々の霊的状態の「生ぬるさ」への批判でもある。この生ぬるさはおそらくラオディキアの町に流れる水の温度である。ラオディアキアの北方数kmの山上にあったヒエラポリス(現在のパムッカレ) を訪れるとそのことに気がつく。ラオディキアには、市ヒエラポリス (現在のパムッカレ) から地下水がひかれてきていたことがわかっている。現在のパムッカレは石灰岩からなる階段状の丘陵地であり、保養のための温泉地でもある。その山上を実際に訪れた時、段々畑状に重なる石灰岩のまばゆいほどの白色が目に焼き付いてしばらく離れなかった。パムッカレの温泉の温度はそもそもそれほど熱くはなかった。もし紀元1世紀の温泉の温度もそうだとすれば、それが地下水路を通ってラオディキアの町にまで到達した時はもう、温泉の湯は、ぬるま湯と水の間くらいの温度になってしまっていたに違いない。町の人々の信仰をその町を流れる水温にたとえること、このことは古代から有名であったヒエラポリスとラオディキアの関係を考えると、当然に比喩として使いたいという気持ちがヨハネには起きたのであろう。そのようなことを考えながら、パムッカレから発掘途上にある南方のラオディキアの遺跡を見つめていた。

聖書の舞台を旅するということは、その地理を肌で感じることにより、記事の背後にある様々な事情を体感するという貴重な経験を得る機会でもある。

たかい・けいすけ (協力研究員)

戦時下の第二高等学校『忠愛寮日誌』

田中祐介

2017年12月に田中祐介編『日記文化から近代日本を問う——人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか』(笠間書院) を出版した。史料としての日記はもとより、多種多様な日記帳の文化 (「モノ」としての日記)、習慣的に書き、時に書かされることの意味 (「行為」としての日記) を研究視座の軸として、計18本の論文を収録した一冊である。私は総論に加え、近代日本の学歴エリートを輩出した旧制高等学校の寮日誌について一稿を寄せた。宮城県仙台市に位置した第二高等学校にはキリスト教主義の忠愛寮があり、その寮日誌『忠愛寮日誌』と総称する) を題材として、寮生全員が目にする公的な媒体に頻出する自己の内面吐露と、それをめぐる紙面上の議論の意味を考察したのであった。

忠愛寮の入寮条件は、キリスト教を信仰するか、少なくとも教えに共感することであった。その寮日誌は1916 (大正5) 年から1946 (昭和21) 年まで、欠落年もあるものの、計17冊が現存する (東北大学史料館蔵)。なかでも、総力戦体制が強化される1930年代後半から太平洋戦争に突入する時期の日誌は印象深い。戦争の緊張が高まる中で、キリスト教主義である忠愛寮は学内外から排撃されたからである。

太平洋戦争の開戦から約一年後の1942 (昭和17) 年12月頃には、二高の最大寮である明善寮から「忠愛寮衰弱、忠愛寮を潰せ」という声があがり、その数日後には明善寮の国粋グループの二、三人が短刀を携えて面会を申込んできたという。

> 彼等は短刀を傍におき、うやうやしく手をついてお辞儀をしてから「お伺い致しますが、天照大神とイエス・キリストの神とどちらがお偉いのでしょうか」と切出した。「それは次元の異る問題で、

比較すべきものでない」というような趣旨のことを答えた。(『忠愛之友倶楽部・忠愛寮五十年以向史』)

忠愛寮に対する圧力は高まるばかりであり、戦況が更に悪化する1945(昭和20)年には、国粋壮士風の明善寮生が乗り込み「神棚をまつれ」と脅迫する。忠愛寮は抗しきれず、5月には寮内一号室に神棚を設置するのやむなきに至ったという。

戦時下における忠愛寮生の報国と信仰の相克を端的に示すものとして、1942(昭和17)年9月12日の寮日誌を見てみよう。

聖書　マタイ伝福音書第六章二五節—三一節
讃美歌　三四七・四四四

日本人たらん
二高生たらん
忠愛寮生たらん

明治天皇御製
事しあらば軍の道にたゝん身は
野をも山をもふみならさなん
かざらんと思はざりせばなか/\に
うるはしからん人の心は

朝礼拝の記録と、近代日本の「神」である明治天皇の御製の共存は、キリスト教主義者でありながら、「神国日本」のために「軍の道にたゝん」とする戦時下の忠愛寮生が抱えた矛盾をそのまま示している。礼拝で読まれたマタイ伝の第六章には、「何を著んとて思ひ煩ふな」の聖句が現れる。それに合わせるように明治天皇の「かざらんと思はざりせば」の言葉を添えたのは、どんな思いからであったろうか。

「日本人たらん」とは、国のために戦い、天皇のために死ぬことに他ならない。「二高生たらん」とは、精神の自由を尊び知識の殿堂に向き合う学歴エリートを体現することである。「忠愛寮生たらん」とは、圧力に屈せずにキリスト教主義の寮生として生き抜くことを意味する。この三つの宣言は、相互に矛盾して共立し得なかった。そのことこそが、忠愛寮生を苦しめた最大の原因であったと言えよう。戦時下の『忠愛寮日誌』にはこのほかにも、出陣と死を見据えて自身の信仰に向き合う無数の切実な言葉が収められている。

たなか・ゆうすけ(協力研究員)

雑録

植木　献

先日学内で映画『ある精肉店のはなし』の上映会を行った。同作品は大阪が舞台で、家族経営で牛を育て、屠畜・精肉を行う精肉店の日常を追ったドキュメンタリーである。ずっと観たいと思っていたが、DVD が発売されておらず、上映会場に足を運ぶか、自分たちで上映会を行うかしか手段がないため、これまで機会がなかったのである。

初めて観ていくつも印象的なシーンがあった。けれどもとりわけ強く記憶に残ったのは、撮影された全行程で作業に携わる家族がみな素手で作業を行っていた点である。

それは肉牛を大事に清潔に育てたからできることであるし、微妙な力加減をしながら作業をするためでもあるし、ケガをせずに全てできる集中力があるからであるし、汚物と可食部を選り分ける確かな技術があるからでもあるし、何より生き物のいのちに触れることへの敬意がそこにあるからである。

この家族が扱うのは、製品でも商品でもなく、いのちである。ぬくもりのある生々しいいのちである。だからそのいのちに触れた者、その肉を口にした者は新たな力といのちを得る。そうした感覚に根ざしてこの精肉店を取り囲む共同体が存在している。感染呪術的かもしれないが、素手で触れることはそうした営みにコミットすることでもある。

けれどもこの生々しいいのちの共同体はいわれのない差別に長く苦しんできた。映画はそうしたカテゴリー＝記号が生み出した抽象的区別をはねのけて生きてきた人たちの記録でもある。

差別された病人に素手で触れて癒したイエスは、記号の操作によって問題を処理するのではなく、生々しいいのちの営みにコミットする解決を示した。確かにそれは「肉となった言」であった。

食肉を巡るドキュメンタリーを観てそんなことを考えた。

うえき・けん（主任）

研究所活動（2018 年 1～3 月）

キリスト教研究所 3 月研究会

開催日時：2018 年 3 月 6 日(火) 15：00-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 92 会議室

発表①

「松山高吉の説教から見た神学思想―『聖書講義並講演』(1880-1886) を中心に」

発表者：洪伊杓(協力研究員)

コメント：嶋田彩司(教養教育センター教授、所員)

発表②

「聖公会と松山高吉―『基督教週報』を中心に」

発表者：松山健作(協力研究員)

コメント：徐正敏(教養教育センター教授、所長)

懇親会

開催日時：2018 年 3 月 6 日(火) 18：00-

開催場所：タンドゥール目黒店

キリスト教文化・芸術研究プロジェクト公開研究会

『音楽によるキリスト教の愛の表現』

開催日時：2018 年 3 月 3 日(土) 15：00-17：00

開催場所：明治学院大学白金校舎本館 5 階 1556 教室

発表：堀朋平(国立音楽大学・西南学院大学講師／本学キリスト教研究所協力研究員)

「宗教の刷新とロマン派――シューベルトとブラームスの愛」

司会・発表：加藤拓未(本学キリスト教研究所協力研究員)

「カール・フィリップ・エマヌエル・バッハの初期の受難曲創作について――1772 年の《ヨハネ受難曲》を中心に」

宣教師研究プロジェクト研究会

第 7 回

開催日時：2018 年 1 月 19 日(金) 13：30-

開催場所：明治学院大学白金校舎キリスト教研究所

第 8 回

開催日時：2018年2月19日(月)13：30-

開催場所：明治学院大学白金校舎本館92会議室

新着図書

・『説教黙想　アレテイア』No.99、日本基督教団出版局、2018。

・『福音と世界』No.1、新教出版、2018。

・『福音と世界』No.2、新教出版、2018。

・『福音と世界』No.3、新教出版、2018。

・『パトリスティカ―教父研究―』第21号、教友社、2018。

・『「韓国からの通信」の時代』池明観著、影書房、2017年。

・『日本キリスト教史』鈴木範久著、教文館、2017年。

・『士師記』J.C.マッカーン著/山吉智久訳、日本キリスト教団出版局、2018年。

・『Isaiah 6-12』Willamson,H.G.M.著、Bloomsbury、2018年。

・『命のビザを繋いだ男　小辻節三とユダヤ難民』山田純大著、NHK出版、2013年。(田口堅吉氏寄贈)

・『帰一協会の挑戦と渋沢栄一　―グローバル時代の「普遍」をめざして―』見城悌治編著、ミネルヴァ書房、2018年。(辻直人協力研究員寄贈)

あんげろす　ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす　第75号

2018年3月10日　発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210／FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷　浩